



いま、活躍する先輩から、あなたへ。

先入観や外部からの情報にとらわれず、
自分自身でさまざまな世界に触れることで、
創造する力を活性化してほしい。
若い今だからこそ、できることです。

写真家

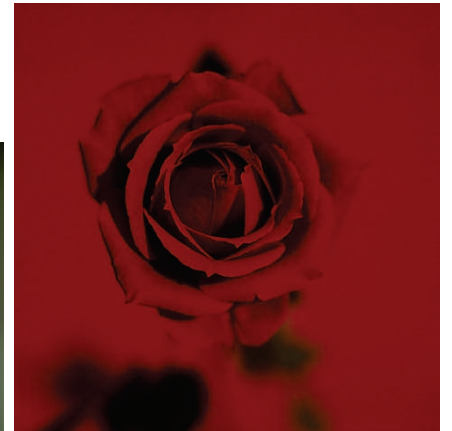
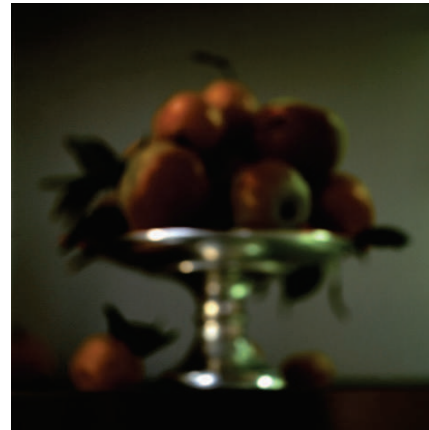
西川 よしえ

Yoshie Nishikawa

札幌大谷短期大学 美術科卒業

写真家、ミラノ在住。札幌大谷短期大学美術科卒業後、サンフランシスコアカデミー・オブ・アート・カレッジにて、ファイナートフォトグラファーを学ぶ。
1983年 フリーランスのフォトグラファーとしてロサンゼルスへ
1984年 東京に事務所を設立。音楽、ファッション、ポートレートを中心に活動
1996年 活動の拠点をミラノに移す。ファッションをはじめ、ポートレート、スタイルライフの撮影のほか、ギャラリーでの展覧会、アートフェア、フォトフェスティバルへの参加など幅広く活動
2009年 朝日新聞社主催、東映、フジテレビジョン協賛、トリエジプト展「イタリアが愛したエジプト」においての写真制作を担当。同年、イタリア写真協会が主催するコンペティションで総合グランプリを獲得
2010年 イタリア写真協会主催のコンペティションで、グラム・ヌード部門で優勝。同年、イタリアプロフェッショナル写真協会役員

ロンドンや東京でフリーランスのフォトグラファーとして忙しく充実した日々を送っていたころ、いつも心の中には「何かが違う」という想いがありました。当時は、日本の経済がバブル景気で浮かれていた頃。たくさんの情報の中で流されるように仕事をするのはなく、好きなものをじっくりと追求できる土壌にいたいと考え、選んだのは場所をミラノに移すこと。自分が東京でやってきたことが海外でどれだけ通用するのか、自分が一人のフォトグラファーとして存在できるかを確認したかったんです。



1. la mia rossa
2. omaggio a caravaggio
3. vermillion



東京で13年間、ファッションフォトグラファーとして請けていたのは、クライアントがある「仕事」でした。ミラノでは、初めて自分の「作品」としてバラの花を撮り、小さな写真展を開きました。それがきっかけで、世界的な照明器具の会社、Fontana Arte社の出版する本の作品撮影をすべて任せられるなど、新しい場所での仕事が始まりました。今はミラノを拠点にフォトグラファーとして仕事をしていますが、実は学生時代は写真の仕事にしようとは思っていませんでした。

札幌大谷に入学したのはデザインを学ぶため。卒業後、撮影スタジオのアシスタントをしたことで、写真の道に入りましたが、今思えば、学生時代にさまざまな領域の勉強ができたことが、創作のベースになっているでしょう。美術の道をめざすみなさんには、絵や音楽などさまざまな分野に触れて、そこから得た感覚を自分が発信する力に変えていく「エネルギーの循環」を実践してほしいと思います。その経験を若いときにしておくことで、創作する力が活性化するのは、また、あきらめないこと

の大切さも知ってほしいです。私は、ヴォーグ誌で仕事をすることが夢のひとつでしたが、それが実現したのは写真を始めて30年たったときです。うまく行かないこともたくさんありました。でも、あきらめると終わってしまいます。あきらめさえしなければ、その夢は叶う可能性があるということ、を、どうか心にとめて前に進んでほしいなと思います。